

学校現場における道徳教育改革への対応と 意識に関する調査研究（3）

—2019 年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として—

Research on Actuality of Correspondence to Moral Education Reform in Schools and Teacher's Consciousness (3):
Focusing on Statistical Analysis and Free Description Analysis in the 2019 Survey for Schools across Japan

押谷由夫 *・矢作信行 **・齋藤道子 **

木崎ちのぶ **・谷山優子 **

小山久子 ***・醍醐身奈 ****

OSHITANI, Yoshio YAHAGI, Nobuyuki SAITO, Michiko

KIZAKI, Chinobu TANIYAMA, Yuko

KOYAMA, Hisako & DAIGO, Mina

目次

- I. 本研究の目的と方法
- II. 調査結果の統計的分析
- III. 調査結果の特定の自由記述の分析
- IV. テキストマイニングを用いた全体的な自由記述の分析

* 武庫川女子大学教育研究所・副所長、教授

** 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士課程後期

*** 大阪芸術大学・特任教授

**** 目白大学・専任講師

1. 本研究の目的と方法

1. 研究の動機

文部科学省は、新教育課程に先駆け、道徳教育の抜本的改善・充実に取り組んでいる。その中核に「特別の教科 道徳」の設置があり、小学校では2018年度から、中学校では2019年度から全面実施されている。新しい道徳教育への移行期にあるこの時期に、学校現場の教師の意見や具体的取組について調査し、教師がその意義を理解し、各学校が主体的に取り組み、意図される効果を上げられるようにするための対策を行うことが求められる。

2. 本研究の目的と方法

本研究は、道徳教育の変革期にあるこの3年間（2017～2019年度）の学校現場の対応の実態を明らかにし、学校現場の教職員がより主体的、意欲的に道徳教育改善・充実に取り組んでいただけるようにするための提案を行うことを目的とする。

本研究チームでは、第1次全国調査を、「特別の教科 道徳」の設置が決定した翌年度の2018年3月に行い、第2次全国調査を、小学校が全面実施された年度の2019年3月に行い、第3次調査を、小学校、中学校ともに全面実施された年度の2020年3月に実施した。今回は第3次の調査の結果を明らかにする。

3. 調査の方法

調査対象校は、第1次、第2次、第3次調査とも同一の学校とした。調査対象校の選定は『全国学校総覧 2017年度』（原書房）より、全国47都道府県の全部の小学校・中学校から、およそ1割の学校を無作為に抽出し、アンケート用紙を送付するという方法を取った。発送学校数は、年度ごとに統廃合校があるため若干の変更がある。第1次調査では、3336校、第2次調査では3331校であった。今回の第3次調査では、3325校であり、回収学校数は1027校。回収率は、30.9%であった。

学校種別および回答者の職別、地域別のサンプルは表の通りである。

調査対象データ1

学校種別

全体	小学校	中学校	小、中一貫校 (義務教育学校)
1027 100%	644 62.7%	362 35.2%	19 1.9%

データ2

職階別

全体	校長	副校長 (教頭)	道徳教育推進教師 (道徳主任)	教務主任、 研究主任	それら以外
1027 100%	110 10.7%	158 15.4%	669 65.1%	63 6.1%	27 2.6%

(上段：校数 以下同じ)

データ 3

学校の地域別

全体	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄	不明
1027	65	126	225	63	30	83	158	93	57	109	13	5
100%	6.3%	12.3%	21.9%	6.1%	2.9%	8.1%	15.4%	9.1%	5.6%	10.6%	1.3%	0.5%

なお、国・公・私立別学校数を示すと以下の通りである

データ 4

国・公・私立別

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
国立	54 5%	27 4%	27 8%	2 1%	7 5%	10 5%	14 5%	4 4%	10 6%	13 9%	5 4%
公立	886 89%	591 92%	295 82%	220 94%	116 89%	178 94%	248 86%	103 91%	125 80%	128 87%	114 93%
私立	60 6%	23 4%	37 10%	12 5%	7 5%	2 1%	25 9%	6 5%	22 14%	7 5%	3 3%

回答した学校は、小学校が 644 校で 62.7%、中学校が 362 校で 35.2% である。学校の国・公・私立別については、「国立」5%、「公立」89%、「私立」6% である。地域別では、学校数の関係で差はあるが、全国の学校から万遍なく回答されている。

(押谷由夫)

II. 調査結果の統計的分析

1. 各校の道徳教育への対応

(1) 道徳教育推進教師の特徴

表 1

道徳教育推進教師（道徳主任）はどのような先生がなられていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
ベテランの先生	317 32%	219 34%	98 28%	89 38%	26 21%	72 38%	79 28%	39 35%	45 29%	51 35%	33 28%
中堅の先生	517 52%	314 49%	203 57%	103 44%	74 58%	100 53%	155 55%	54 48%	84 54%	68 46%	61 51%
若手の先生	162 16%	107 17%	55 15%	41 18%	27 21%	17 9%	51 18%	19 17%	27 17%	29 20%	26 22%

道徳推進教師は、どのような教師が割り当てられているのかを尋ねると、「ベテラン」と「中堅」の教師が、84% を占めている。2017 年度・2018 年度調査と同様の結果である。「ベテラン」と「中堅」については、地域別では、「北海道・東北」が 91% で一番高

い。「若手」の教師は、「九州・沖縄」が22%で高い。校種別、学校規模、地域別を比較して見ると、おおそ「ベテラン」3割、「中堅」5割、「若手」2割の実態を指摘できる。

(2) 道徳教育を重視している学校の割合

表2

学校経営において道徳教育が重視されていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
重視されている	351 35%	246 38%	105 29%	93 40%	46 36%	69 36%	92 32%	41 36%	46 30%	57 38%	49 40%
まあまあ重視されている	566 57%	346 54%	220 61%	123 52%	68 53%	111 58%	162 56%	61 54%	94 60%	80 53%	62 51%
あまり重視されていない	77 8%	45 7%	32 9%	17 7%	14 11%	10 5%	30 11%	11 10%	14 9%	11 7%	10 8%
重視されていない	8 1%	5 1%	3 1%	2 1%	1 1%	0 0%	3 1%	0 0%	2 1%	2 1%	1 1%

学校経営において、道徳教育が「重視されている」「まあまあ重視されている」と回答した学校が9割である。校種別、学校規模別、地域別にみても、ほぼ同様である。この傾向は、2017年度・2018年度の結果と同じである。この3年間、ずっと道徳教育が重視されてきたことになる。

2. 全体計画について

(1) 道徳教育を推進させるための組織

表3

学校全体で道徳教育を推進するための組織を作っていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
前から作っている	566 59%	348 57%	218 63%	102 45%	90 73%	61 46%	194 71%	53 48%	108 70%	73 50%	67 59%
今年度作った	33 3%	14 2%	19 6%	7 3%	2 2%	6 3%	10 4%	1 1%	7 5%	4 3%	5 4%
作っていない	359 38%	249 41%	110 32%	118 52%	31 25%	89 51%	71 28%	56 51%	39 25%	68 47%	42 37%

道徳教育推進のための組織を作っている学校は、62%である。大規模校（「701名以上」）の組織づくりの方が進んでおり、小規模校（「200人以下」）との差は、27%となっている。小規模校では「作っていない」が5割であるが、学校全体で取り組んでいる割合が高いと考えられる。地域別に見ると、差が大きい。「北海道・東北」「北陸・中部」「中国・四国」の組織づくりが低い。小規模校が多いことが原因とも考えられる。

(2) 全体計画に書かれている内容の達成度

表 4

全体計画に書かれていることがどの程度達成されていると評価できるでしょうか

	原 案														
	だいたい達成されている			まあまあ達成されている			あまり達成されていない			見直しが必要である			全体計画に示していない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 「特別の教科 道徳」の指導	39%	25%	13%	53%	34%	18%	6%	3%	3%	10%	5%	5%	3%	1%	2%
2. 各学年の道徳教育	33%	22%	12%	58%	38%	18%	5%	2%	2%	16%	10%	6%	4%	7%	2%
3. 各学級の道徳教育	34%	23%	13%	53%	31%	15%	6%	4%	3%	7%	7%	7%	3%	0%	1%
4. 各教科の授業に市 じな道徳教育	31%	19%	11%	59%	38%	20%	6%	3%	2%	13%	9%	4%	19%	7%	12%
5. 道徳教育の推進に市 じな道徳教育	11%	8%	3%	53%	37%	16%	30%	16%	13%	27%	17%	20%	8%	5%	3%
6. 特別活動における 道徳教育	12%	9%	3%	65%	39%	21%	21%	12%	9%	17%	27%	20%	5%	3%	2%
7. 総合的な学習の時間 における道徳教育	10%	7%	3%	54%	35%	19%	28%	17%	10%	50%	37%	22%	15%	7%	9%
8. 家庭における道徳 教育	22%	15%	7%	61%	40%	21%	11%	6%	5%	17%	9%	8%	13%	5%	3%
9. 地域との連携によ る道徳教育	24%	16%	8%	48%	32%	17%	35%	19%	16%	78%	41%	37%	31%	10%	21%
10. 地域目標の達成に よる道徳教育	7%	5%	1%	38%	27%	10%	40%	23%	16%	33%	19%	14%	14%	17%	27%
11. 総合目標の達成に よる道徳教育	22%	14%	6%	59%	39%	20%	18%	7%	9%	37%	23%	15%	9%	3%	9%

全体計画で示している内容について、教育活動のなかでどの程度達成されていると評価できるかを尋ねた。全体で見ると「だいたい達成されている」「まあまあ達成されている」と回答した学校が、45%～93%となっており、項目間で大きな開きがある。

達成の評価が高い項目は、上位から「各学年の道徳教育」93%、「『特別の教科 道徳』の指導」92%、「各学級の道徳教育」91%である。反対に、「あまり達成されていない」「見直しが必要である」の回答が多いのは、「地域との連携による道徳教育」50%、「家庭との連携による道徳教育」44%である。

達成の評価が低い2項目の校種別比較では、中学校の方がいずれも、達成できていないと答えている割合が高い。2018年度結果との比較では、全体に、「あまり達成されていない」と評価した学校が増えている。期待値が上がっているともとらえられる。

(3) 全体計画の見直し（教科化以降）

表 5

「特別の教科 道徳」が実施されて、全体計画の見直しをしましたか

	全体	校種別		学校規模			
		小学校	中学校	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上
行っていない	57 6%	31 5%	26 7%	13 6%	29 6%	12 6%	4 3%
少し行った	203 21%	117 19%	86 24%	45 19%	95 21%	39 21%	27 22%
ある程度行った	322 33%	215 34%	107 30%	76 33%	150 33%	58 31%	45 36%
だいぶん行った	132 13%	84 13%	48 14%	26 11%	63 14%	26 14%	21 17%
全体的に見直した	274 28%	185 29%	89 25%	74 32%	120 26%	54 29%	28 22%

「特別の教科 道徳」が2018年に小学校で、2019年に中学校で全面実施となったことを踏まえて、本調査では、2019年度の実態について、見直しの程度を尋ねた。見直しを「行っていない」のは、6%に過ぎず、反対に「全体的に見直した」のは、28%であった。程度の差こそあれ、9割以上の学校が見直しを行っている。新しい道徳教育に合わせて、改善を図ろうとしている現場の様子が見てとれる。

(4) 各教科等における道徳教育について

表 6

道徳の指導内容項目と関連づけた教育活動を別葉として作成していますか

	全体	校種別		学校規模			
		小学校	中学校	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上
作成しており、よく活用している	135 14%	105 17%	30 9%	37 16%	62 14%	18 10%	18 14%
作成しており、ときどき活用している	373 38%	268 42%	107 31%	80 35%	171 38%	72 38%	55 44%
作成しているが、あまり活用していない	266 27%	156 25%	110 31%	68 29%	123 27%	51 27%	30 24%
作成しているが、ほとんど活用していない	56 6%	34 5%	22 6%	13 6%	26 6%	11 6%	6 5%
作成していない	155 16%	73 12%	82 23%	33 14%	74 16%	37 20%	17 14%

各教科等における道徳教育を具体的に示した別葉を作成している学校は、84%である。「作成していない」学校が16%で、小学校より中学校の方が11%高い。「作成しているが、あまり活用していない」「作成しているが、ほとんど活用していない」が全体で33%

となっている。別葉の作成が定着してきている一方で、活用しきれていないととらえている学校が、3割以上あるということである。

3. 年間指導計画について

(1) 年間指導計画に書いている内容の変化（教科化前との比較）

表 7

「特別の教科道徳」になり、年間指導計画に書かれていることが変わりましたか

	簡略になった			変わらない			詳しくした			以前も今も書いていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 基本的発問	79 6%	48 6%	31 2%	411 43%	279 45%	152 24%	269 28%	167 27%	102 30%	186 19%	128 21%	58 17%
2. 板書計画	57 6%	31 5%	26 2%	366 37%	235 37%	131 38%	185 19%	116 18%	69 20%	372 38%	250 40%	122 35%
3. 事後の指導に関すること	46 5%	26 4%	20 2%	454 47%	304 49%	150 44%	186 19%	113 18%	73 21%	236 29%	184 29%	102 30%
4. 事後の指導に関すること	41 4%	26 4%	15 4%	443 46%	300 48%	149 43%	212 22%	128 20%	84 25%	289 28%	179 28%	97 28%
5. 家庭との連携に関すること	24 3%	16 3%	8 2%	545 57%	345 56%	200 59%	150 16%	113 18%	37 11%	741 25%	145 23%	96 28%
6. 地域との連携に関すること	26 3%	20 3%	6 2%	567 59%	350 58%	208 61%	181 19%	63 10%	32 9%	234 24%	140 23%	94 27%
7. 各教科等との関連について	37 4%	25 4%	12 4%	510 53%	318 53%	192 58%	304 32%	218 35%	88 26%	85 9%	43 7%	47 13%

年間指導計画に書いている内容ごとに、教科化後の変化について尋ねた。「詳しくした」内容は、上位から、「各教科等との関連について」33%、「基本的発問」28%、「事後の指導に関すること」22%となっている。そのうち「各教科等との関連について」は、校種別で大きな差があり、小学校の方が10割高く「詳しくした」と回答している。「板書計画」について「以前も今も書いていない」学校が38%だが、逆に年間指導計画に書いている学校が62%ということになる。「板書計画」を年間指導計画に書いているのは、2017年度（24%）・2018年度（58%）の結果と比較すると、着実に上昇している。

(2) 道徳の教科書以外の教材について（補助教材としても含めて）

表 8

年間指導計画の中に、道徳の教科書の教材以外の教材が、各学年平均して、どの程度入れていますか

	入れていない			1～2教材入れている			3～5教材入れている			5教材以上入れている		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 文部科学省発行の「私たちの道徳」に掲載されている教材	539 54%	375 58%	164 46%	308 31%	171 27%	137 39%	50 5%	28 5%	24 7%	90 9%	59 9%	31 9%
2. 文部科学省で以前に開発された読みぬき教材	716 72%	477 75%	239 67%	230 24%	130 21%	100 28%	20 3%	17 3%	3 1%	13 1%	6 1%	7 2%
3. 都道府県や市町村などで開発された道徳教材	451 45%	260 41%	191 54%	388 39%	287 42%	121 34%	118 12%	88 14%	32 9%	36 4%	24 4%	12 2%
4. 民間が発行する道徳本の教材	879 89%	468 74%	211 58%	134 20%	87 15%	98 28%	35 4%	18 3%	19 5%	77 8%	49 8%	28 8%
5. 学校が独自に開発した教材	736 75%	533 85%	203 52%	504 20%	78 12%	116 33%	36 4%	12 2%	27 8%	15 2%	7 1%	6 2%
6. その他の教材	589 59%	392 91%	197 83%	55 8%	26 6%	29 12%	32 2%	8 1%	8 3%	13 2%	8 2%	5 2%

道徳の教科書の教材以外で、各項目の教材をどの程度入れているか（補助教材としても含めて）について、4段階で尋ねた。小学校、中学校ともに教科書が使われているが、他の教材も使われていることがわかる。『私たちの道徳』は、3割の学校で「1～2教材入れている」と答えており、「6教材以上入れている」学校も1割近くある。また、「都道府県や市町村などで開発された道徳教材」も「1～2教材入れている」学校が39%、「3～5教材入れている」学校が12%となっている。

なお、「学校が独自に開発した教材」を「1～2教材入れている」学校が20%、「3～5教材入れている」学校が4%となっており、どちらも中学校が3倍以上の割合になっている。道徳の授業は、身近な教材を活用することも大切である。各学校の努力をうかがうことができる。今後さらに、「学校が独自に開発した教材」の開発・活用が求められる。

（３）一定期間の道徳授業を振り返る授業の効果

表 9

年間指導計画の中に、道徳の授業全体を振り返るような時間を設けた場合の効果はどうか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
効果的であった	146 15%	61 10%	85 24%
ある程度効果的であった	339 34%	206 32%	133 37%
あまり効果的ではなかった	28 3%	16 3%	12 3%
設けていない	482 48%	355 56%	127 36%

教科化された道徳の授業においては、各時間の学習内容が積み重なって効果を上げていくようにすることが大切である。そのためには、一定期間の道徳授業を振り返る取り組みが必要になる。そのような時間を設けているか、設けている場合はその効果はどうかを尋ねた。結果は、「設けていない」学校が48%。小学校が56%に対し、中学校は36%と大きな開きがある。教科化された意識が中学校のほうが高いのかもしれない。2018年度調査と比較すると、全体ではほとんど変わらないが、中学校で16%減少している。つまり、道徳の授業を振り返る「時間を設けた」学校が、1年間で16%増えているのである。

「時間を設けた」学校のうち、「効果的であった」と答えた学校が約3割、「ある程度効果的であった」と答えた学校が7割近くある（表9では設けていない学校も含めて割合を出しているので、それぞれを2倍にしている）。中学校のほうが、「効果的であった」と答えた学校が小学校の倍近くの割合になっている。

(4) 重点的に指導した内容の効果

表 10

重点的に指導する内容項目について、効果的な指導ができましたか

	全体	校種別		学校規模	
		小学校	中学校	200人 以下	701人 以上
計画的に取組み効果も感じられた	457 46%	304 48%	153 43%	107 46%	61 48%
計画的に取り組んだが、あまり効果的ではなかった	204 21%	131 21%	73 20%	48 21%	30 24%
計画的には取り組めなかったが、効果的だった	178 18%	110 17%	68 19%	47 20%	17 13%
計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった	91 9%	51 8%	40 11%	19 8%	12 9%
行っていない	65 7%	42 7%	23 6%	13 6%	7 6%

重点的に指導する内容項目について尋ねた結果は、「計画的に取組み効果も感じられた」学校が46%、「計画的には取り組めなかったが、効果的だった」が18%で、計64%の学校が「効果的だった」と回答している。校種別・学校規模別においてもそれほど差がない。「行っていない」学校が7%、「計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった」と回答した学校が9%ある。重点的指導は、学校の状況や社会的課題などを考慮して取り組むものであり、より効果的な重点的指導の工夫が求められる。

(5) 2019年度の年間指導計画の見直しについて

表 11

今年度、どの程度年間指導計画を見直しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
見直さなかった	230 23%	132 21%	98 27%
1回見直した	582 58%	415 65%	167 47%
2回見直した	131 13%	75 12%	56 16%
3回以上見直した	55 6%	18 3%	37 10%

2019 年度に年間指導計画を見直したかどうかについて尋ねると、「見直さなかった」が小学校 21%、中学校が 27%、「1 回見直した」が小学校 65%、中学校が 47%となっている。「2 回見直した」は全体で 13%、「3 回以上見直した」は 6 %になっているが、いずれも中学校のほうが高くなっている。2018 年度と比較すると、全体的にほとんど同じような傾向にある。年間指導計画の見直しは、教科書使用前と同様に行われているととらえられる。

(6) 学校全体で道徳の授業に取り組む体制

表 12

今年度、学校全体で道徳の授業に取り組もうとする体制は機能しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
機能したと思う	296 30%	170 27%	126 35%
だいたい機能したと思う	519 52%	332 52%	187 52%
あまり機能しなかったと思う	129 13%	98 15%	31 9%
来年度見直したい	33 3%	26 4%	7 2%
体制ができていない	18 2%	11 2%	7 2%

2017 年度では、「学校全体で取り組む体制ができているか」という問いに、95% の学校が「できている」と回答していた。2018 年度は「体制ができていない」学校は 5 %、2019 年度は 2 %と、ほとんどの学校において、学校全体の体制の中で取り組まれている。なお、2018 年度からは「体制が機能したか」という問いにしたところ、肯定的に「機能したと思う」「だいたい機能したと思う」と回答した学校が 80% であった。2019 年度は、「機能したと思う」「だいたい機能したと思う」と回答した学校が 82% であり、ほとんど変わっていない。学校別でみると、中学校が、「機能したと思う」と回答した学校が 13 校増えている。

(木崎ちのぶ)

4. 「特別の教科 道徳」の授業について

(1) 教科書による授業

表 13

教科書を使うようになって、道徳の授業はしやすくなったように思いますか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変しやすくなったと思う	136 14%	97 15%	41 12%
だいぶんしやすくなったと思う	279 29%	197 31%	82 24%
まあまあしやすくなったと思う	259 27%	162 26%	97 28%
あまり変わらないと思う	224 23%	150 24%	74 21%
少ししにくくなったと思う	58 6%	16 3%	42 12%
だいぶんしにくくなったと思う	20 2%	7 1%	13 4%

「道徳の教科書を使うようになって、道徳の授業がしやすくなったか」という問いに、全体で、「大変しやすくなったと思う」が14%、「だいぶんしやすくなったと思う」が29%、「まあまあしやすくなったと思う」が27%で、肯定的な回答をした学校が全体で70%であった。学校段階別では、小学校は72%、中学校は64%であった。小学校については、2018年度も同じ質問をしたが、ほとんど同じ回答であった。ただし、「大変しやすくなった」が、わずかではあるが3ポイント増えている。

なお、「少ししにくくなったと思う」が、小学校3%に対し中学校は12%、「だいぶんしにくくなったと思う」が、小学校1%に対して中学校は4%になっている。

(2) 教科書の活用

表 14

教科書をどの程度活用しましたか

	活用状況											
	そのまま活用した			少し変えた			ある程度変えた			だいたい変えた		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 学習指導要領の主題等別 (道徳の動きが教科書通りであったかどうか)	303 31%	210 33%	93 28%	415 42%	280 45%	125 35%	158 16%	87 14%	71 20%	118 12%	52 8%	68 18%
2. 教科	818 62%	424 66%	194 55%	303 30%	175 27%	128 36%	60 8%	35 6%	25 7%	15 2%	8 1%	8 3%
3. 教材	575 58%	374 58%	201 57%	342 34%	215 34%	126 35%	63 6%	41 6%	22 6%	16 2%	9 1%	7 2%
4. 授業の進め方	220 22%	147 23%	73 21%	508 51%	337 53%	171 48%	211 21%	123 19%	88 25%	97 6%	38 5%	24 7%
5. 重点的指導	338 39%	269 42%	118 33%	488 47%	293 46%	175 49%	112 11%	61 10%	51 14%	28 3%	12 2%	11 3%

2019年度「教科書をどの程度活用したか」を尋ねた結果は、年間指導計画の主題配列に関わっては、「そのまま活用した」が小学校で33%、中学校で26%であった。「だいぶ変えた」が小学校で8%、中学校で19%であった。使用している教科書を発行している出版社が提供する主題配列をそのまま使うのではなく、7割の学校において、自校に合う形で修正されている。その傾向は中学校のほうが強い。

具体的な修正内容としては、「教材」に関して、小学校が34%、中学校が45%の学校において変えている。「少し変えた」学校がほとんどであり、小学校は全体の27%、中学校は36%であった。「ねらい」は、「変えた」学校が小学校42%、中学校43%となっており、「少し変えている」学校が多い。

また、「授業の進め方」においては、小学校、中学校ともに8割近くの学校において変えており、「少し変えた」が小学校53%、中学校が48%である。「ある程度変えた」学校も、小学校で19%、中学校は25%となっている。

さらに、「重点的指導」においては、小学校で58%、中学校で67%の学校において変えている。「少し変えた」が全体で47%、「ある程度変えた」が11%になっている。指導の時期や、重点的に指導する内容や、実際の授業展開においては、児童生徒の状態や学校・学級の状況に応じて、柔軟に対応しているととらえられる。

(3) 授業について

表 15

貴校の道徳授業を全体的に見て、よくなってきていると感じますか

	回 答											
	かなりよくなっている			だいぶよくなっている			ほとんど変わっていない			よくなっていると感じない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 修学年の道徳授業 (中学校では1年)	177 18%	105 17%	72 20%	548 55%	430 68%	218 61%	163 16%	100 16%	63 18%	6 1%	2 0%	4 1%
2. 前半年の道徳授業 (中学校では2年)	163 16%	99 16%	64 18%	657 66%	428 67%	229 64%	168 17%	106 17%	62 17%	7 1%	4 1%	3 1%
3. 後半年の道徳授業 (中学校では3年)	157 16%	91 14%	66 19%	542 65%	427 67%	215 60%	184 19%	114 18%	70 20%	11 1%	5 1%	6 2%
4. 事前の指導の工夫	84 9%	48 8%	36 10%	465 47%	296 47%	169 47%	434 44%	286 45%	148 42%	9 1%	5 1%	4 1%
5. 導入の工夫	145 13%	97 16%	48 13%	626 63%	398 63%	228 64%	219 22%	139 22%	80 22%	4 0%	2 0%	2 1%
6. 教材提示の工夫	158 16%	106 17%	52 15%	604 61%	391 62%	213 60%	229 23%	137 22%	92 26%	2 0%	2 0%	0 0%
7. 展開の工夫	159 16%	99 16%	60 17%	633 64%	406 64%	229 63%	197 20%	124 20%	73 20%	5 1%	5 1%	0 0%
8. 終末の工夫	127 13%	77 12%	50 14%	599 60%	382 60%	217 61%	262 26%	174 27%	88 25%	5 1%	3 1%	2 1%
9. 教材の多様性	97 10%	53 8%	44 12%	483 49%	316 50%	167 47%	382 38%	249 39%	133 37%	32 3%	16 3%	14 4%
10. 事後の指導の工夫	81 8%	37 6%	24 7%	486 49%	314 49%	172 49%	433 44%	280 44%	153 43%	11 1%	5 1%	6 2%
11. 板書の工夫	168 17%	121 19%	47 13%	555 56%	379 60%	176 49%	263 27%	134 21%	129 36%	8 1%	2 0%	6 2%
12. 子どもたちへの対応	160 17%	101 16%	54 18%	623 63%	411 65%	212 59%	203 20%	122 19%	81 23%	2 0%	2 0%	0 0%
13. 授業の評価	178 18%	98 16%	80 23%	644 65%	422 67%	222 62%	166 16%	106 17%	49 14%	12 1%	7 1%	5 1%

「貴校の道徳の授業がよくなっていると感じるか」を、授業を充実させるポイントなど13項目にわたって尋ねた。すべてにおいて、「よくなっているとは感じない」という回答が、小学校、中学校ともに1%前後であった。学校現場では、道徳の授業改善に向けて積極的に取り組み、効果も実感されている様子を読み取ることができる。

「ほとんど変わっていない」と感じている学校が多い項目は、まず、「事前の指導の工夫」と「事後の指導の工夫」で、ともに44%であった。小学校、中学校ともほぼ同じ割合である。次が、「教材の多様性」で38%。ここでも小学校、中学校ともにほぼ同じ割合である。事前指導の工夫や事後指導の工夫、教材の多様性については、道徳の授業を充実させる大きなポイントであり、より意識的に取り組んでいく必要がある。

なお、これら以外の項目については、「ほとんど変わっていない」と回答した学校は少ないが、「かなりよくなっている」と回答した学校は15～18%である。さらにこれらの項目についても、より効果的な指導ができるように取り組んでいく必要がある。また、小学校と、中学校を比較すると、「板書の工夫」については、「かなりよくなっている」と回答した学校では、中学校が小学校より6%低くなっている。中学校における道徳の授業改善の大きなポイントといえそうである。

(4) 授業についての効果

表 16

次のような道徳の授業について、どの程度効果を感じていますか

	回 答								
	効果を感じている			まあまあ効果を感じる			あまり効果を感じない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 登場人物への自我関与が中心の授業	250 26%	174 28%	76 22%	642 66%	408 65%	234 67%	83 9%	46 7%	37 11%
2. 問題解決的な授業	261 27%	166 26%	95 27%	616 63%	404 64%	212 61%	101 10%	59 9%	42 12%
3. 道徳的行為に関する体験的な授業	210 22%	127 21%	83 25%	584 62%	391 64%	193 58%	148 16%	91 15%	57 17%
4. 各教科との関連を重視した授業	76 8%	59 10%	17 6%	502 55%	374 61%	128 42%	341 37%	184 30%	157 52%
5. 学級活動との関連を重視した授業	181 19%	113 18%	68 20%	631 66%	424 68%	207 61%	150 16%	87 14%	63 19%
6. 学校行事との関連を重視した授業	225 23%	138 22%	87 25%	603 62%	394 63%	209 60%	143 15%	91 15%	52 15%
7. 総合的な学習の時間との関連を重視した授業	124 13%	82 13%	42 13%	539 58%	357 58%	182 56%	271 29%	172 28%	99 31%
8. 学級経営との関連を重視した授業	255 26%	187 30%	68 20%	606 62%	390 62%	216 63%	112 12%	55 9%	57 17%
9. 日常生活との関連を重視した授業	296 31%	205 33%	91 27%	598 62%	379 60%	219 64%	77 8%	45 7%	32 9%

道徳の授業について、様々な方法が提案されているが、その効果を9項目にわたって尋ねた。まず、「道徳教育にかかわる評価等の在り方に関する専門家会議」の報告に添付された「道徳科における質の高い多様な指導方法について」で提案された3つの学習について見てみると、「登場人物への自我関与が中心の授業」は、小学校で93%の学校が、中学校では89%の学校で「効果を感じる」「まあまあ効果を感じる」と回答している。「問題解決的な授業」は、小学校が90%、中学校が88%、「道徳的行為に関する体験的な授業」は、小学校が85%、中学校が83%の学校において何らかの効果を感じている。

また、学校全体で取り組む道徳教育の要の役割を果たすのに大切な、様々な教育活動や日常生活と関連を図る指導については、次のような結果になっている。最もよく効果を感じているのは、「日常生活との関連を重視した授業」である。小学校で93%、中学校で91%の学校で「効果を感じている」「まあまあ効果を感じている」と回答している。「学級経営との関連を重視した授業」でも、小学校で92%、中学校で83%であった。

逆に、これからの課題としてとらえられるのは「各教科との関連を重視した授業」である。「効果を感じている」「まあまあ効果を感じている」と回答した学校は、小学校で71%、中学校で48%である。教科担任制をとる中学校では難しい点が多くあるが、まずは自分の担当する科目と連携することが考えられる。「特別の教科道徳」が道徳教育の要としての役割を果たすためには、各教科との関連をいかに図るかが大きな課題であるといえよう。

「学級活動との関連を重視した授業」では、何らかの効果を感じている学校が、小学校で86%、中学校で81%。「学校行事との関連を重視した授業」は、小学校が85%、中学校が85%。「総合的な学習の時間との関連を重視した授業」は、小学校71%、中学校が69%となっている。これらは小学校と中学校の差がほとんどない。特に「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通してよりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力」を養うことを目標とする総合的な学習の時間との関連を重視した授業を、一層取り組む必要がある。

(5) 道徳ノート、道徳ファイル、指導用のノート等の効果

表 17

道徳ノートは効果的でしたか

1. 道徳ノート	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	152 15%	99 16%	53 15%
ある程度効果的であった	325 33%	238 38%	87 25%
少しは効果的であった	84 9%	50 8%	34 10%
改善を必要とする	42 4%	28 4%	14 4%
持たせていない	383 39%	219 35%	164 47%

表 18

道徳ファイルは効果的でしたか

2. 道徳ファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	126 13%	74 12%	52 15%
ある程度効果的であった	357 36%	229 36%	128 36%
少しは効果的であった	117 12%	64 10%	53 15%
改善を必要とする	28 3%	16 3%	12 3%
持たせていない	359 36%	252 40%	107 30%

道徳ノートと道徳ファイルの効果について尋ねた。道徳ノートは、「持たせていない」という回答が小学校 35%、中学校 47%であった。持たせれば、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が小学校 62%（2018 年度 67%）、中学校 50%（2018 年度 40%）となっている（「持たせている」学校のみで評価を計算すると、それぞれの割合がさらに高くなる）。道徳ノートを持たせて活用の仕方を工夫していくことが求められる。

道徳ファイルについても同様に、「持たせていない」という回答が小学校 40%、中学校 30%であった。持たせれば、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が小学校 58%（2018 年度 48%）、中学校 66%（2018 年度 51%）となっている（道徳ノートと同様に、「持たせている」学校のみで評価を計算すると、それぞれの割合がさらに高くなる）。道徳ファイルの方が活用されやすい傾向がみられる。特に、中学校では、様々な資料を配布して授業をし、それらを綴じていくという方法がとられているのではないかと考えられる。

表 19

道徳教育の重点的指導用のノートかファイル（冊子も含む）は効果的でしたか

3. 重点的指導用のノートかファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	45 5%	27 4%	18 5%
ある程度効果的であった	148 15%	97 15%	51 15%
少しは効果的であった	61 6%	38 6%	23 7%
改善を必要とする	23 2%	15 2%	8 2%
持たせていない	703 72%	452 72%	251 72%

道徳教育の重点的指導用ノートやファイルの効果について尋ねた。まず、そのようなノートやファイルを「持たせていない」という回答が、小・中学校ともに72%であった。持たせている学校においては、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が、26%であった（「持たせている」学校のみで評価を計算すると、約3倍の75%近くになる）。道徳教育の重点的指導用のノートやファイルがあれば、より自覚的に、より集中的に道徳学習に取り組むことができる。今後の課題といえよう。

（６）現在使用している教科書についての意見

表 20

現在使用している教科書について、どのような意見をおもちでしょうか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
このままでよい	628 63%	423 66%	205 58%
少し改善してほしい	286 29%	179 28%	107 30%
かなり改善してほしい	63 6%	28 4%	35 10%
大幅に改善してほしい	16 2%	8 1%	8 2%

現在使用している教科書についての意見を尋ねた。「このままでよい」という回答は、小学校66%、中学校58%で、6割である。「少し改善してほしい」は全体で3割、残り1割（小学校では5%）が「かなり改善」「大幅改善」を求めている。9割がおおむね満足していると考えられる。

なお、改善してほしい点について自由記述で尋ねている。詳細は、自由記述の分析で述べる。

（７）「特別の教科 道徳」の評価について

表 21

「特別の教科道徳」の評価について、今年度どのようにしましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人 以下	701人 以上	北海道・ 東北	関東・ 甲信越	北陸・ 中部	近畿	中国・ 四国	九州・ 沖縄
各学期ごとに行った	426 43%	309 48%	117 33%	99 42%	54 43%	58 31%	167 59%	38 34%	73 47%	48 32%	48 39%
年度末にまとめて行った	496 50%	277 43%	219 61%	118 50%	60 47%	109 57%	105 37%	65 58%	73 47%	88 59%	66 54%
その他	75 8%	54 8%	21 6%	18 8%	13 10%	23 12%	13 5%	10 9%	9 6%	13 9%	8 7%

「特別の教科 道徳」の評価の時期について尋ねた。全体でみると「各学期ごと」が43%、「年度末」が50%、「その他」の回答も8%であった。2018年度の調査で、小学校のみに尋ねたが、今回とほぼ同じ結果であった。

校種別では、小学校は「各学期ごと」が若干多く（48%）、中学校は「年度末」が多い（61%）。学校規模では、200人以下と701人以上で見ると、200人以下の学校の方が、若干ではあるが「年度末」が多い。

地域別では、「各学期ごと」が多いのは、関東・甲信越が59%（「年度末」は37%）、近畿が47%（「年度末」と同数）である。「年度末」が多いのは、北海道・東北や北陸・中部、中国・四国、九州・沖縄で6割近くである。

各教科の評価は学期ごとに行われていることから「特別の教科 道徳」も学期ごとに行うようにすることが求められる。

（８）学校全体での道徳授業研修

表 22

今年度、学校全体で道徳授業の研修をどの程度行いましたか

	全体	校種別		学校規模	
		小学校	中学校	200人以下	701人以上
行っていない	174 18%	137 22%	37 10%	48 21%	30 24%
1～3回行った	683 69%	416 65%	267 75%	149 64%	76 60%
4～6回行った	73 7%	43 7%	30 8%	16 7%	15 12%
7回以上	63 6%	41 6%	22 6%	21 9%	6 5%

学校全体での道徳の授業研修を「行っていない」のは、全体では18%である。学校段階別では小学校が22%、中学校が10%である。2018年度は小学校10%、中学校16%であったものが、大きく逆転している。「特別の教科 道徳」が全面実施されて一年目と二年目の違いが出ているのであろうか。最も多いのは「1～3回行った」で、小学校65%、中学校75%である。学期に1回あるいは夏休みに研修を行うのが一般的かと推測される。2018年度、「4～6回行った」は小学校、中学校ともに14%で、2019年度はともに半減している。大きな課題を指摘できる。

(9) 道徳授業についての話し合い

表 23

各学年や学年段階で、道徳授業の話し合いはどの程度行われていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
よく行われている	161 16%	72 11%	89 25%	35 15%	19 15%	30 16%	43 15%	11 10%	34 22%	25 17%	20 16%
ときどき行われている	530 53%	337 53%	193 54%	106 46%	69 54%	89 47%	156 55%	59 53%	89 57%	75 50%	69 56%
あまり行われていない	219 22%	163 26%	55 16%	59 25%	26 22%	46 24%	62 22%	30 27%	26 17%	32 22%	25 21%
ほとんど行われていない	83 8%	64 10%	19 5%	33 14%	11 9%	24 13%	23 8%	11 10%	6 4%	17 11%	8 7%

では、各学年などで道徳授業の話し合いはどの程度なされているであろうか。2019年度に「よく行われている」「ときどき行われている」と回答した学校が、全体で69%（2018年度は74%、2017年度は61%）であり、2018年度と比べて5%下がっている。しかし、中学校は79%（2018年度は74%）で5%上昇している。地域別では、近畿79%、九州・沖縄71%、関東・甲信越70%と近畿が高い。道徳の授業について、職員室や学年会議で話題になっていることがうかがえるが、「ほとんど行われていない」と回答した学校が、小学校で10%、中学校で5%ある。

5. 道徳教育に関する先生方の意識

(1) 道徳教育に対する先生方の意識

表 24

回答者の勤務する学校における教員の実態についての意識

	回 答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 道徳教育の大切さについて理解している	479 48%	323 50%	156 44%	481 48%	296 46%	185 52%	35 4%	18 3%	17 5%	4 0%	4 1%	0 0%
2. 道徳教育の目標について理解している	296 30%	200 31%	96 27%	598 60%	386 60%	212 59%	96 10%	48 8%	48 13%	9 1%	6 1%	3 1%
3. 「特別の教科 道徳」の大切さについて理解している	398 40%	273 43%	125 35%	536 54%	329 52%	207 58%	56 6%	32 5%	24 7%	8 1%	5 1%	3 1%
4. 「特別の教科 道徳」の目標について理解している	252 25%	180 28%	72 20%	629 63%	399 62%	230 64%	109 11%	55 9%	54 15%	8 1%	5 1%	3 1%
5. 「特別の教科 道徳」の指導方法について理解している	202 20%	132 21%	70 20%	653 65%	420 66%	233 65%	134 13%	82 13%	52 15%	10 1%	6 1%	4 1%
6. 「特別の教科 道徳」の評価について理解している	190 19%	122 19%	68 19%	624 63%	410 64%	214 60%	167 17%	99 16%	68 19%	18 2%	9 1%	9 3%
7. 道徳教育に熱心な教師が多い	171 17%	109 17%	62 17%	561 56%	376 59%	185 52%	248 25%	142 22%	106 30%	18 2%	12 2%	6 2%
8. 道徳の授業に熱心な教師が多い	163 16%	103 16%	60 17%	543 55%	368 58%	175 49%	273 27%	157 24%	116 32%	18 2%	11 2%	7 2%
9. 道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い	121 12%	81 13%	40 11%	515 52%	341 54%	174 49%	330 33%	195 31%	135 38%	24 2%	15 2%	9 3%
10. 道徳の授業を楽しんでいる教師が多い	71 7%	44 7%	27 8%	404 41%	286 45%	118 33%	482 49%	285 45%	197 55%	36 4%	21 3%	15 4%

次に、回答している先生から見た、勤務している学校の教員の道徳教育に対する意識について、尋ねた。「道徳教育の大切さ」「道徳教育の目標」「『特別の教科 道徳』の大切さ」「『特別の教科 道徳』の目標」「『特別の教科 道徳』の指導方法」については、理解している（「そう思う」「だいたいそう思う」）が95%～86%である。「評価についての理解」は、「あまり思わない」が17%で、2018年度25%であったのが8%少なくなっており、理解が進んでいるととらえられる。これらの項目は、小学校と中学校でほとんど同じような傾向にある。

しかし、「道徳の授業に熱心な教師が多い」については、「あまり思わない」「ほとんど思わない」が全体で29%、小学校では26%、中学校では34%であった。「授業を楽しんでいる教師が多い」は、「あまり思わない」「ほとんど思わない」が全体で53%、小学校では48%、中学校では59%であった。小学校と中学校で比較すると、中学校の方がいずれも10%前後高い。道徳の授業に熱心なあまり、授業が楽しめなくなっていることも考えられる。どうすれば道徳の授業を楽しくできるかを考えながら、授業の展開を熱心に考えるという姿勢が求められる。

「道徳教育は自分自身のことであると思っている教師が多い」に対し、64%が肯定的に回答している（2018年度63%であり、ほとんど変わらない）。道徳教育は、子どもの課題であると同時に、大人の課題でもある。自分自身の道徳教育でもあるという認識で、児童生徒とともに取り組んでいく心構えが求められる。

（2）教師から見た家庭や地域の人々への意識

表 25

先生から見て、この1年を振り返って家庭や地域の様子はいかがですか

	回 答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 子どもの道徳教育に関心・熱心な保護者が多くなった	27	17	5	220	188	51	878	398	230	172	53	89
	2%	3%	1%	22%	27%	14%	63%	63%	65%	12%	8%	19%
2. 子どもの道徳教育について熱心な地域の人たちが多くなった	20	15	5	193	157	36	830	897	238	151	68	23
	2%	2%	1%	19%	25%	10%	63%	62%	65%	15%	11%	23%
3. 地域の人たちの協力が得られるようになった	26	37	9	248	188	60	846	336	210	151	64	87
	5%	6%	3%	25%	31%	14%	55%	53%	58%	15%	10%	24%
4. 保護者の協力が得られるようになった	33	27	6	297	226	71	528	828	200	181	53	78
	3%	4%	2%	30%	36%	20%	55%	52%	56%	13%	8%	22%

回答している先生から見た家庭や地域の人々の意識について尋ねた結果を見ると、「子どもの道徳教育に熱心な保護者が多い」では、否定的に答えた先生が小学校71%（2018年度56%、2017年度53%）、中学校は84%（2018年度72%、2017年度61%）で、大幅に増えていっている。家庭では、いろいろな考えをもつ保護者に育てられており、それぞれの家庭において何らかの道徳教育が行われている。それらを大切にしながら、共に生きるという視点から学校で学ぶ道徳教育と関連を図っていくことが求められる。

また、「地域の人たちの協力が得られている」や「保護者の協力が得られている」については、肯定的に答えた回答者は3割である（2018年度は5～6割）。2018年度と比べて大幅に減少している要因として、学校側の要求や期待が高まっていることも挙げられるかもしれないが、大きな課題である。学校の取り組みを保護者や地域の人々にわかるように広報活動を工夫したり、保護者参観などに道徳のノートを見せて、心を豊かに育んでいる様子を伝えたりすることなどを工夫して、保護者や地域の人々が自発的に協力したいと思える状況を創っていくことが求められるといえよう。

（３）「特別の教科 道徳」になったことについての意識

表 26

「特別の教科道徳」になったことについて、どう思いますか

	全体	校種別		地域の環境	
		小学校	中学校	農山漁村	近郊・新興住宅地
よかったと思う	316 32%	215 34%	101 29%	126 31%	149 30%
まあまあよかったと思う	440 45%	278 44%	162 46%	185 45%	228 46%
あまりよかったとは思わない	180 18%	111 18%	69 20%	78 19%	95 19%
よかったとは思わない	46 5%	24 4%	22 6%	20 5%	23 5%

道徳が教科化になったことについてどう思うかを尋ねた。「よかった」「まあまあよかった」という肯定的回答が、全体で77%であり、小学校では78%、中学校では75%であった。地域環境で比較すると、農山漁村にある学校と、近郊・新興住宅地にある学校とでは、ほとんど差がなかった。ほぼ4分の1の先生において道徳の教科化に否定的であるということを、今後の課題として真剣に考える必要がある。自分の考えを聞いてもらえる道徳の授業は好きだという子どもたちも多い。子どもたちの言動が変わってくると手ごたえがあり、毎週授業をすることへの負担感が、期待感に変わるのではないだろうか。

なお、この問いに対する自由記述については、後ほど詳しく見ていく。

(4) 教師の道徳教育に対する意識

表 27

道徳教育に対する先生の意識

	回 答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任
1. 道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる	946 96%	97 92%	151 96%	637 96%	61 98%	41 4%	9 9%	6 4%	25 4%	1 2%
2. 教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	910 92%	105 97%	143 91%	605 91%	57 92%	80 8%	3 3%	15 10%	57 9%	5 8%
3. 道徳教育は、他律的な道徳性の育成が前提にあって、自律的な道徳性が高められる	901 92%	98 94%	144 92%	603 92%	56 90%	76 8%	6 6%	13 8%	51 8%	6 10%
4. どのような子どもたちも、学校に來ればしっかりと成長できる	854 87%	93 86%	136 88%	571 87%	52 84%	132 13%	15 14%	19 12%	86 13%	10 16%
5. 学力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	881 90%	95 89%	139 89%	590 90%	57 92%	102 10%	12 11%	17 11%	68 10%	5 8%
6. 体力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	700 71%	80 74%	117 75%	460 70%	43 69%	286 29%	28 26%	39 25%	200 30%	19 31%
7. いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される	962 97%	102 94%	155 98%	645 98%	60 97%	27 3%	6 6%	3 2%	16 2%	2 3%
8. 道徳教育を充実させることで家庭との連携が深まる	842 85%	99 93%	136 87%	556 84%	51 82%	146 15%	8 8%	21 13%	105 16%	11 18%
9. 道徳教育を充実させることで地域との連携が深まる	802 81%	100 96%	129 82%	523 79%	50 81%	184 19%	7 7%	28 18%	137 21%	12 19%
10. 「特別の教科 道徳」の授業時数を40時間くらいにすると、もっと多様な授業ができる	391 40%	44 41%	72 46%	251 38%	24 39%	894 60%	64 59%	85 54%	407 62%	38 61%
11. 教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	773 79%	79 75%	117 75%	529 80%	48 77%	209 21%	27 26%	39 25%	129 20%	14 23%

次に、回答している先生の道徳教育に関する意識を尋ねた。2018 年度、2017 年度に比べ、どの項目も大幅に肯定的回答が上昇している。特に高いのが「道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる」（2019 年度 96%、2018 年度 91%）や「いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される」（2019 年度 97%、2018 年度 85%）である。ほかにも多くの項目が 9 割を超えている。

回答者に注目すると、職階別の回答には、ほとんど差がみられない。道徳と体力との関連については、3 割（2018 年度 5 割）が「そう思わない」と回答しており、2018 年度より 2 割減少している。健康意識の高まりで、体力や健康の維持はよりよく生きることと関連づけられつつあるととらえることもできるのではないか。道徳の授業を年間 40 時間するという意見については、否定的な回答が 6 割（2018 年度 8 割）で、ここでも 2 割減少している。これも、道徳の授業の大切さを実感されている先生方の意識が反映しているとも考えられる。副校長（教頭）の肯定的な回答が高いので、将来校長になられたときに道徳の時間数についてもっと柔軟に対応できていくのではないだろうか。教員養成においても、「もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図る」べきだとする意識に対する回

答が、2018 年度は 6 割であったのに、2019 年度は 8 割と大きく伸びている。特に推進教師がそのように考えている傾向がある。道徳教育に関して専門性の高い教員の養成が、大学での教員養成段階から求められているといえよう。

(5) 道徳教育に対する要望

表 28
道徳教育に対する先生の要望

	回 答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任
1. 道徳教育を充実させるための特別予算がほしい	465 47%	62 57%	76 50%	302 45%	23 37%	519 53%	47 43%	76 50%	355 54%	39 63%
2. 道徳教育の指定校を多くしてほしい	196 20%	20 18%	29 19%	142 21%	5 8%	797 80%	89 82%	128 82%	523 79%	57 92%
3. 道徳教育の専門教師を加配してほしい	535 54%	50 46%	81 52%	375 56%	29 47%	458 46%	59 54%	76 48%	290 44%	33 53%
4. 道徳教育研修の機会を多くしてほしい	673 68%	64 59%	89 63%	474 71%	36 58%	319 32%	45 41%	58 37%	190 29%	26 42%
5. 文部科学省は道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	665 67%	54 50%	89 57%	481 72%	41 66%	329 33%	55 51%	68 43%	185 28%	21 34%
6. 文部科学省は「特別の教科 道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	696 70%	59 55%	98 62%	496 75%	43 69%	295 30%	49 43%	59 38%	159 25%	19 31%

これからの道徳教育に対する要望では、道徳教育や「特別の教科 道徳」の授業の進め方についての資料がほしいという要望が 70%（2018 年度 79%）と高い。「研修の機会を多くしてほしい」は、68%（2018 年度 79%）、「特別予算がほしい」は、47%（2018 年度 62%）で、予算や資料等への要望より研修がしたいという傾向にある。しかし、いずれも「そう思う」率は低下している。これらについては、自由記述の内容分析で詳細を見ていく。

（谷山優子）

6. 教師の道徳教育に対する意識の傾向性（因子分析による検討）

教師の道徳教育に対する意識（表 28）について、因子分析による検討を行った。回答している教員が 11 項目の意見についてどう思うか、主因子法による因子分析を行った。3 因子構造が妥当であると考えられ、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。明確な 3 つの因子が得られた。累積寄与率は、48.92 であった。

取り出した 3 因子について、次のように解釈された。第 1 因子は、「道徳教育を充実させれば、学校教育を高めたり育むことができる」「道徳教育を積み重ねていけば、道徳性が高められる」などが密接に関連しており、「道徳教育有効性・道徳性向上因子」と名付けた。第 2 因子は、「道徳教育を充実させることで、地域との連携が深まる」「道徳教育を

充実させることで、家庭との連携が深まる」が密接に関連しており、「地域・家庭連携因子」とした。第3因子は、「教員養成において、もっと道德教育の単位をとれるようにして充実を図るべきだ」「『特別の教科 道德』の授業時数を40時間くらいにすると、もっと多様な授業が工夫できる」が密接に関連しており「制度充実因子」とした。これら3つの因子が、教師の道德教育に対する意識の傾向性の背景にあることが明らかになった。

表 29

教員意識尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

	因子		
	I	II	III
5. 学力の育成は、道德教育を充実させることで高められる	.708	.078	-.014
4. どのような子どもたちも、学校に来ればしっかりと成長できる	.624	-.065	.015
1. 道德の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道德性は高められる	.619	.09	-.051
3. 道德教育は、他律的な道德性の育成が根幹にあって自立的な道德性がはぐくまれる	.612	-.033	-.009
6. 体力の育成は、道德教育を充実させることで高められる	.505	.181	.075
2. 教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	.499	-.111	.098
7. いじめなどの子どもたちの問題行動は、道德教育を充実させることである程度改善される	.418	.288	-.039
8. 道德教育を充実させることで、家庭との連携が深まる	-.035	.967	.006
9. 道德教育を充実させることで、地域との連携が深まる	-.02	.923	.014
10. 「特別の教科道德」の授業時数を40時間くらいにすると、もっと多様な授業が工夫できる	-.066	.071	.715
11. 教員養成において、もっと道德教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	.144	-.06	.526

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 a

a 5 回の反復で回転が収束した。

(木崎ちのぶ)

III. 調査結果の特定の自由記述の分析

(「教科書について」、「『特別の教科 道德』について」)

本調査においては、特定の自由記述を、2カ所をお願いした。それぞれについて、以下その内容を紹介し分析する。

1. 教科書についての意見

まず、教科書についての意見を見てみたい。設問は、「現在使っておられる教科書につ

いて、どのような意見をおもちでしょうか。()内の番号で教えてください。「1 このままでよい」以外の番号を選択された方は、どのようなところを改善してほしいとお考えになられているかをいくつでも結構ですとお書きください。」というものである。

なお、「1 このままでよい」は63%、「2 少し改善してほしい」は29%、「3 かなり改善してほしい」は6%、「4 大幅に改善してほしい」は2%であった。

(1) 教科書そのものについての意見

教科書そのものに対する意見を頻度順に挙げると次の通りである。()内は件数。

- ◆ もっと身近な話題や関心をもてるものを取り上げてほしい (33)
- ◆ 内容が難しい・児童生徒の発達段階に合わせてほしい (31)
- ◆ 教材文の分量を少なくしてほしい・長すぎる (31)
- ◆ 子どもがもっと自分で考えられる教材にしてほしい (18)
- ◆ 内容項目が目立ち過ぎる・価値の押し付けになっている (18)
- ◆ 内容と道徳的価値・ねらい等を合わせてほしい (17)
- ◆ 挿絵のイラストや色彩を工夫してほしい (14)
- ◆ 葛藤のある教材を増やしてほしい (10)
- ◆ もっと多くの教材から選択できるようにしてほしい (8)
- ◆ 教科書に発問や考える視点等を入れないでほしい (7)
- ◆ 学校や地域の実態に即した教材を使わせてほしい (6)
- ◆ 文中に答えが書いていないものを増やしてほしい (5)
- ◆ 動画やDVDが見られるよう工夫してほしい (5)
- ◆ 問題解決的な内容を増やしてほしい (4)
- ◆ 教材数や説明を増やしてほしい (4)
- ◆ ソーシャルスキルの内容を増やしてほしい (3)
- ◆ 子どもがもっと議論できる内容を入れてほしい (3)
- ◆ 教材の並び順を工夫してほしい (3)
- ◆ 家族やいのち等の教材は多様な家庭環境に配慮してほしい (3)
- ◆ 登場人物の名前やカタカナの名前をわかりやすくしてほしい (3)
- ◆ 実在の人物の生き方についての教材を増やしてほしい (3)
- ◆ 内容項目を減らしてほしい (1)
- ◆ もっと多くの教材から選択できるようにしてほしい (1)
- ◆ 誰もが授業ができる内容にしてほしい (1)

以上の意見をまとめると、次のようになる。

- 1) 内容に関心や興味がもてない・児童生徒の実態に合わない・心に響く感動的な教材が少ない等の理由から、教材をもっと児童生徒にとって身近な話題や関心もてる内容を求める意見が多い。
- 2) 特に中学生の教材は一度読んで内容を理解するのが難しい・発達段階に合っていない等の理由から、内容理解がしやすく発達に即した教材を求める意見が多い。
- 3) 特に高学年・中学校の教材文が長いいため考えさせる時間が十分にとれない・取り扱う内容項目が多い等の理由から、教材文を短くしてほしいとの意見が多い。
- 4) 道徳的価値に対して誘導的・押し付け的・教え込み的な感じがある・もっと児童生徒の多様な意見を引き出せるような内容にしてほしいとの意見も比較的多い。
- 5) 葛藤のある教材・問題解決型の教材を求める意見等から、児童生徒がもっと考えを深められる教材を求める意見も比較的多い。
- 6) 教材の内容と道徳的価値やねらいが合致していない・展開が難しい等との理由から、更なる教材の吟味と精選を求める意見も比較的多い。
- 7) 時代背景が古く、児童生徒が理解しにくかったり、内容に入りにくかったりしている・もっと現代的な課題を取り上げてほしい等の理由から、今の児童生徒の実態に即した教材の内容を求める意見も比較的多い。

(2) 指導書に対する意見

指導書に対する意見を多い順に挙げると次のようになる。

- ◆ 発問が児童生徒の考えから離れている・難しい (16)
- ◆ 発問がねらいを意識し過ぎている (11)
- ◆ 一つの教材に様々なバリエーションを持たせた発問や展開がほしい (6)
- ◆ 発問が多すぎる (6)
- ◆ 議論できる発問を載せてほしい (2)
- ◆ 終末では教材から離れて考える発問例や展開例の工夫をしてほしい (2)
- ◆ 児童生徒の考えが深まるような発問を工夫してほしい (1)
- ◆ ねらいと指導がつながるような展開を工夫してほしい (1)
- ◆ 評価に係る児童の反応例をもっと入れてほしい (1)
- ◆ 内面的資質を重点的に育む指導書にしてほしい (1)

これらを整理すると、次のようにまとめられる。

- 1) 指導書の展開に準じて授業を行っている教員の意見として、発問が児童生徒の実態にそぐわない・深まらない・難しい等との理由から、発問の更なる吟味と精選を求める意見が多く見られる。

- 2) 指導書の発問が、ねらいを意識し過ぎるため児童生徒の多様な意見が出にくい・ねらいと発問が合っていない・展開に無理がある・授業の流れが児童生徒の思考の流れに合わない等の理由から、発問がねらいを意識し過ぎていて、児童生徒の思考に合っていないという意見も多く見られる。
- 3) 指導書に一つの展開や発問例を載せるのではなく、様々なバリエーションを考えた指導例を載せてほしいとの意見も比較的多く見られる。
- 4) 指導書の発問の数が多過ぎるとの意見も見られる。
- 5) 終末での教材を離れた展開例や具体的な発問例を求める意見も見られる。
- 6) 議論できる発問・児童生徒の考えが深まる発問・ねらいと展開が一致する発問・評価に係る児童生徒の反応例の掲載・内面的資質を重点的に育む指導書を求める意見も見られる。

(3) 道徳ノート・学習ノート・別冊ノート・ワークシートに対する意見

最後に、道徳ノート・学習ノート・別冊ノート・ワークシートに対する意見としては、次のものがあつた。

- ◆ 道徳ノートやワークシート等が使いづらい (40)
- ◆ ワークシートや教科書への記入欄を工夫してほしい (7)
- ◆ ワークシートがデジタル教科書以外で使えるようにしてほしい (1)
- ◆ 応用がきかない (1)

このような意見をもう少し詳しく見ていくと次のようになる。

「道徳ノートやワークシートの使いづらさ」に寄せられた意見には、「道徳ノートに発問が記載されているため教師が考えた発問と異なる時に使えない」「記入欄のスペースが児童生徒の実態に合わせられない」「道徳ノートに発問が書いてあるため誘導的になる」「書くことが多くて話し合う時間が取られる」「自由記述にした方がよい」「教科書と一体型の学習ノートがよい」等の理由から、全体として道徳ノート等は使いづらいとの意見がかなり多く見られた。

(齋藤道子)

2 「特別の教科 道徳」についての意見

次に、自由記述で意見を求めた設問は、「道徳の時間が『特別の教科 道徳』になったことについて、あなたのご意見をお聞かせください。まず、()内の番号を選んで、その理由を、書いてください。」というものである。なお、「1 よかったと思う」は32%、「2 まあまあよかったと思う」は45%、「3 あまりよかったとは思わない」は

18%、「4 よかったとは思わない」は5%であった。

(1) 断然多い意見

全体の意見を見ると、次の3つの意見が突出している。

- ◆ 評価が難しい・課題がある (159)
- ◆ 教員が道徳や道徳教育を大切に考えるようになった・意識の変化があった (120)
- ◆ 授業の時間数が確保できるようになった・時数が増えた (120)

まず、評価に関する課題を多くの教員が抱えている。この傾向は今後も続くと考えられる。また、道徳教育に対する教員の意識の変化やそれに伴う授業数の確保に対する好意的な意見は、今までの「道徳の時間」における課題が克服されている実態を確認することができる。

(2) 教科化に肯定的な意見

次に、教科化について肯定的にとらえている意見についてまとめると、次のようになる。

- ◆ 授業の質・教師の指導力が向上した・変化した (54)
- ◆ 子どもの意識・道徳性の変化があった (37)
- ◆ 目標・ねらい・評価などが明確になった (33)
- ◆ 教科書ができた・指導がやりやすくなった (26)
- ◆ 年間指導計画がより活用されるようになった (25)
- ◆ 子どもの実態を教師がよくみとれるようになった・把握しようと努力している (21)
- ◆ 授業研修・校内研修・公開授業が増えた、実施しやすくなった (21)
- ◆ 担任やクラスごとの力量差が緩和された・バラツキが減った (11)
- ◆ 評価ができるようになった・評価が入ることで真剣に取り組むようになった (11)
- ◆ 人間理解（人の強さ・弱さ・自己や他者理解など）ができるようになった (10)
- ◆ 保護者との連携がとりやすくなった・理解が得やすくなった (7)

上位3つの意見に次いで多かった意見は、道徳の授業の質に関係する意見であった。道徳の授業や道徳教育を大切にしようとする意識や授業時数の確保が、授業の質や指導力の向上、更に研修の充実に繋がっていると考えられる。

また、「子どもの意識や道徳性の変化」を確認できたことや「人間理解（人の強さ・弱さ・自己や他者理解など）ができるようになった」ことは、授業が順調に行われているということでもある。その大きな要因として、目標・ねらい・評価などが明確になったことや、教科書の使用による指導のしやすさ、年間指導計画のより効果的な活用があるととら

えられる。それらによる教師の授業への姿勢とゆとりが、子どもの実態をしっかりと把握して授業を行うことにつながり、子どもの意識や道徳性の変化へとつながっているのではないかと考えられる。

さらに、保護者との連携もしやすくなったという意見の背景には、保護者が「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の効果を、子どもたちの姿で感じ取っておられることがあるのではないかととも考えられる。

(3) 教科化に否定的な意見や課題についての意見

教科化に対する否定的な意見や課題を指摘する意見として、次のようなものがある。

- ◆ 道徳評価欄が増えるなど、業務が増えた (17)
- ◆ 教科になってもあまり変化が見られない (10)
- ◆ 教科にする意味があったのかわからない (8)
- ◆ 教科としての質・内容についての疑問がある (7)
- ◆ 教科書に課題がある・扱いにくい (7)
- ◆ 熱心に道徳について取り組む教員は増えていない・十分とはいえない (4)
- ◆ 学校の実態と離れてしまっているのではないか (4)
- ◆ 価値の押し付けになっている (3)
- ◆ 授業や指導に自信がもてない (2)
- ◆ 年間 35 時間は長い (2)
- ◆ 現場任せになっている (1)
- ◆ 他の教育課程にしわよせがきている (1)
- ◆ 子どもたちが正解を出そうとしてしまう (1)
- ◆ 教師が授業などの工夫・研究をしなくなった (1)

教科化に否定的な意見としては、指導要録や通知表に記入する「特別の教科 道徳」の評価は、個人内評価による記述方式によることから、どうしても負担感を感じるということである。この部分は、最も多くあった意見である評価に関する悩みと、併せて対応を考える必要がある。また他の記述方式の評価の欄と合わせて調整を図ることも求められる。

また、「教科になってもあまり変化が見られない」「教科にする意味があったのかわからない」「教科としての質や内容に疑問がある」といった意見は、以前の「道徳の時間」のときの実態と比べてであるとも考えられる。「道徳の時間」でも充実していたのに、「教科化する意味があったのかわからない」という意見になっているとも考えられる。「教科書に課題がある」「熱心に取り組む教師が増えていない」などの意見は、むしろ道徳の授業を充実させるという立場からの批判とも考えられる。

その次からの意見は、件数は少ないものの、これからの道徳の授業の改善にとって貴重な意見であるといえる。「学校の実態と離れてしまっているのではないか」や「価値の押し付けになっている」「授業や指導に自信がもてない」「年間 35 時間は長い」「現場任せになっている」「他の教育課程にしわよせがきている」「子どもたちが正解を出そうとしてしまう」「教師が授業などの工夫・研究をしなくなった」といった意見は、これからの大きな検討課題としてとらえられる。学校の実態に応じて、行政の協力も得ながら（チーム学校体制で）、年間指導計画も魅力的なものにし、研修機会も多く設けて教師が自信をもてるようにし、子どもたちが主体的に学べる授業を工夫することが大切である、といったことをポイントとして挙げるができる。

（矢作信行）

IV. テキストマイニングを用いた全体的な自由記述の分析

アンケートでは、今回も道徳教育や「特別の教科 道徳」について、全体にわたって自由に意見を述べてもらう欄を設けている。そこに記述されている内容について、テキストマイニングを用いて分析する。今回も、この技法の代表的なフリーソフトウェアで、現在もバージョンアップを続けている KH Coder を用いる。

また、前回同様、主に 3 種類の基本的な分析を行う。それは、①抽出語リスト、②元の文から検索して「語」の使われ方を確認する KWIC コンコーダンス、そして③抽出語間および外部変数との関連性と強さを確認できる共起ネットワークである。

#	抽出語	品詞/活用	頻度
1	道徳	名詞	292
2	授業	サ変名詞	156
3	思ふ	動詞	149
4	評価	サ変名詞	117
5	教育	サ変名詞	89
6	教科書	名詞	86
7	時間	名詞可能	68
8	教材	名詞	57
9	教師	名詞	56
10	指導	サ変名詞	56
11	学校	名詞	55
12	教員	名詞	53
13	必要	形容動詞	49
14	教科書	名詞	46
15	子ども	名詞	45
16	考える	動詞	44
17	先生	名詞	43
18	感じる	動詞	40
19	大切	形容動詞	38
20	研究	サ変名詞	37
21	研修	サ変名詞	34

図1 2019年度4項目合同抽出語リスト

1. 抽出語リスト（上位 10 語、降順）から読み取れること

まず、どのような語が抽出されているのか、出現回数は何回かを確認する。次に、抽出された上位 10 語がアンケートの各質問項目でどのような意味をもつのかについて推測する。

自由意見の欄は、「1. ぜひ伝えたいこと」「2. 要望」「3. 意見」「4. その他」に分かれている。それぞれの枠に記述されている上位 10 語の中には、共通抽出語が 6 語（「その他」においてのみ 5 語）、各質問項目における独自に存在する抽出語は、質問項目 1 では「時間」「学校」、2 では「研修」、3 では「子ども」「必要」、4 では「担任」である。ここでは、特に、

独自に存在する抽出語について検討する。

※各質問項目 10 位以内において、 は各質問項目にわたる共通抽出語、 は 2018 年度と比較して新出の抽出語、 は各質問項目独自の抽出語

1. ぜひ伝えたいこと

「道徳」「授業」「思う」「教育」「評価」 「時間」「教科」「学校」「教材」「教師」

※「時間」「学校」は、新出語でもある。

2. 要望

「道徳」「授業」「思う」「評価」「指導」 「教育」「教材」「研修」「資料」「教科」

※「資料」とは、「教材」or「映像資料」or 指導資料（教師の指導や評価等の参考となるもの・子どものワークシート）の意味で使われている。

3. 意見

「道徳」「評価」「思う」「授業」「教育」「教科」 「子ども」「必要」「感じる」「教員」

※「子ども」は、新出語でもある。

4. その他

「道徳」「思う」「教科」「授業」「教師」「評価」「教員」「指導」「感じる」「担任」

※「教師」は「道徳教育推進教師」or「教員」、「教員」は「教師」「担任」を含む教職を司る者、「担任」は「学級担任のみが授業をすることに無理がある」という文脈で使われており、新出語でもある。

「時間」という語が含まれている意見は、「週一回の授業を大切にしていきたい」「全学級一斉道徳授業の公開」「教科書の効用」「教科化の効用」「総合的な学習の時間との関連させることの重要性」「時数の確保が難しい」「道徳を検討する学年会を開くための時間や研修の時間確保が必要」「35 時間中に 22 項目の指導にゆとりが必要」「子ども達と向き合う時間的・精神的余裕が必要なので道徳の教科には反対」「〇〇教育が増えすぎ任せっぱなしにされても応える時間がない」等の記述の中で使われている。過重負担がかかっている厳しい学校の状況が述べられている。

「研修」という語が含まれている意見は、2018 年度は、質問 4 項目中 3 項目において上位 10 語の中に「研修」があり、多くの意見が述べられていたが、2019 年度は、「2. 要望」のみに留まっており、件数は減少している。2018 年度は、小学校で研修の効果性について述べられ、中学校では研修を行い全面実施の準備をしているといった、小・中学校共に新しい道徳科に向けて取り組まれている様子が伺われた。2019 年度も小・中学校共に、「授業公開をしながら研修の充実を図っている」「道徳教育や道徳科を充実させることはとても大切なことであり、そのために教員は時間を生み、研修に励んでいるが、研修に費やす時間が限られていることが課題であり、もっと時間がほしい」と、引き続き熱心に

取り組んでいるものの、研修時間の確保の難しさを指摘している。

また、「授業の進め方について、研修の機会が多くあるとよい。実践で悩んでいる教師が多い。」とさらなる研修の機会をもつことを望むと共に、クラス担任の限界を感じている表現もある。また、実施してみて、さらに道徳科の授業の進め方、評価・発問のあり方について悩んだり、大きな負担感を感じたりしている、だから、教科化にはやはり反対と考えている教員もいるという記述もあった。一方、推進していこうとする意見の中では、研修・セミナーの開催・文科省からの指導資料の配信、教科書の充実を強く望む記述が多く見られる。

「子ども」という語が含まれている意見では、「子どもの成長の中でも変化の見えにくい心の部分に大きくかわる内容なので、まずは方向性の共有ができ授業改善を進めつつあることで今年度はよかったと考えている」「大人の生き方そのものが道徳教育だと思い、子どもたちと一緒に自分を見つめ変わっていきたい」「いろいろな意見や考えがあっっていんだという点で子どもたちの多様性を引き出すことができる教科」「子どもの真の成長に繋がるか評価に懸念」「道徳教育を支える教師集団のあり方、限りある時間の中で効果的に道徳科を進めるための資料等の必要性」等について述べられている。

2. 共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れること

まず、質問項目と語の共起ネットワーク分析を行った（図 2-1、図 2-2）。その結果、質問 4 項目において共通抽出語が多いこと、上位 10 位以内には入っていない抽出語も、順位を下げていくとどの質問項目にも存在することなど、両年度とも質問 4 項目と抽出語との関わりが大変強いことから、これ以降、4 項目を一括して分析を行う。

4 項目合同で共起ネットワーク分析を行った結果が図 3-1 と図 3-2 である。一般に、共起ネットワーク図では、抽出語数・抽出語間の関連性の強さを円弧の大小及び線の太さで可視化できる。2019 年度における抽出語と抽出語との関連性を 2018 年度と比較しながら分析・考察すると、以下のような 7 つの語群が見られる。

- 1 「道徳教育、道徳科推進における概要」
- 2 「様々な教育内容の対応による負担感」
- 3 「時間確保の必要性」
- 4 「道徳科推進のための研修」
- 5 「道徳科推進の具体的方策」
- 6 「子どもに関わる評価と所見」
- 7 「道徳科・道徳教育への力の入れ方」

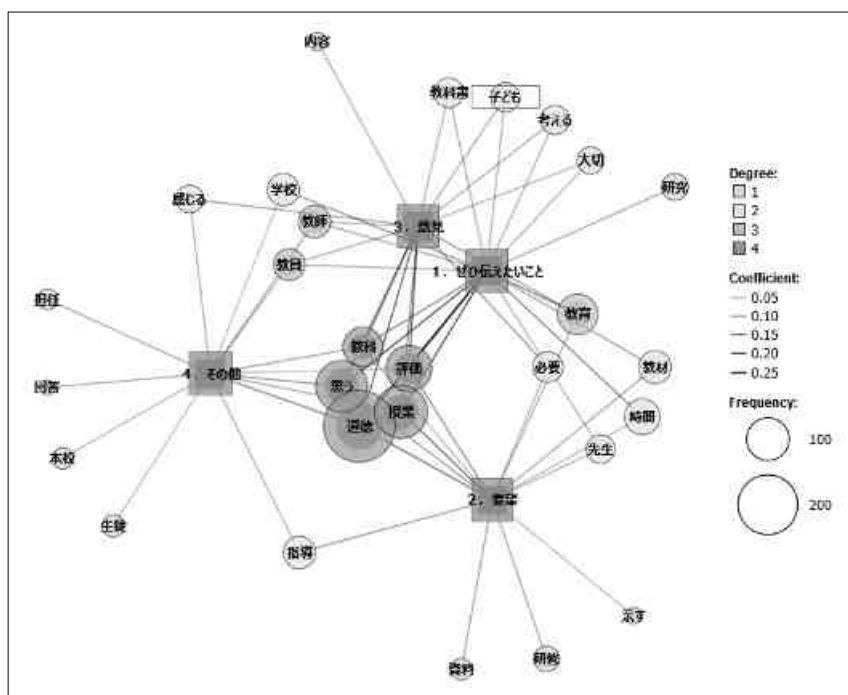


図2-1 2019年度質問項目と語の共起ネットワーク

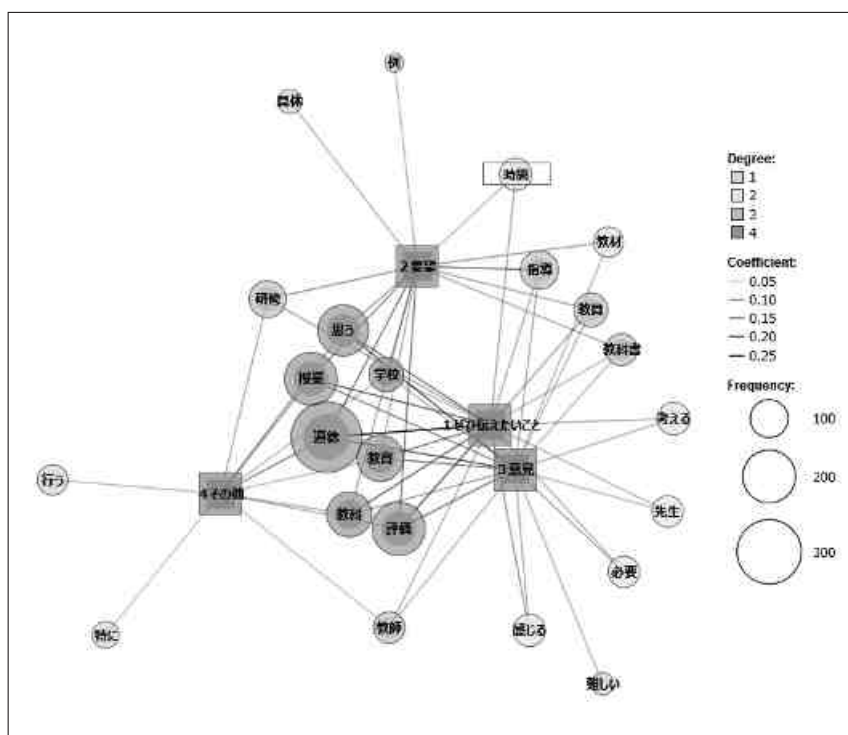


図2-2 2018年度質問項目と語の共起ネットワーク

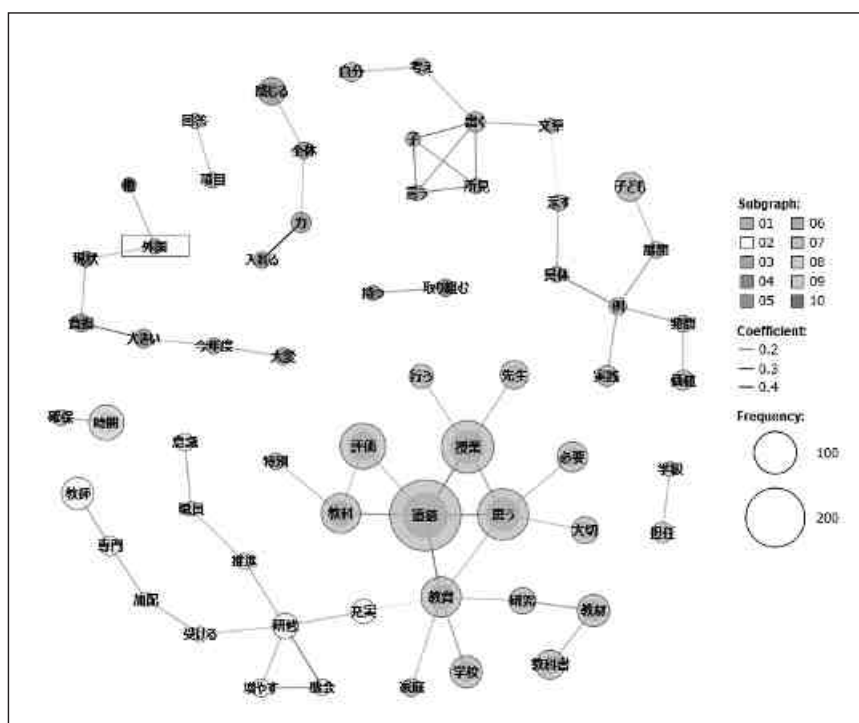


図3-1 2019年度4項目合同共起ネット

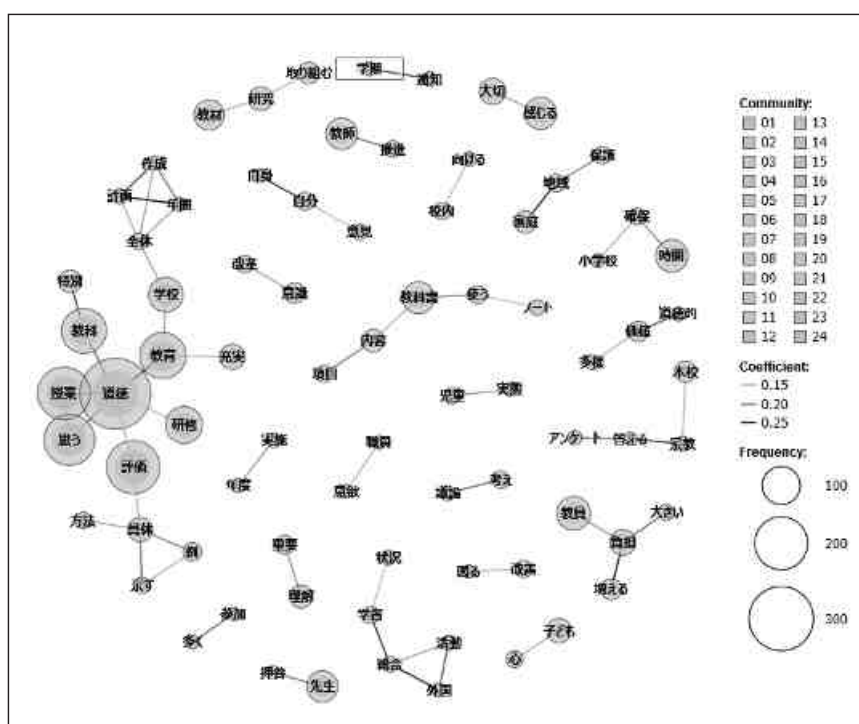


図3-2 2018年度4項目合同共起ネット

2018年度と2019年度には類似した語群が見られる（1～4）が、2019年度では中学校においても全面実施されたことから、回答内容により具体性が見られる（5～7）。

1の「道徳教育、道徳科推進における概要」では、抽出語リスト上位10位の内、特に6つの共通抽出語がその中心に位置している。2018年度では中心に位置していた『研修』が、2019年度では中心から離れ、より具体性を帯び、別の語群4を作っているところに変化が見られる。元の文章で見ると「放課後の多くの時間を使って、教材研究・評価の研修を進めている」「道徳の授業づくりを通して教師が互いに良き研修を行えている」「地方の教員にも文科省の研修を受けられる機会がほしい」と、小・中共に熱心な取り組みや要望が見られる。

一方、2、3にも関連するが、道徳・外国語・特別支援・IT等、新しい教育内容が次々と現場に求められ、大きな負担を強いられている状況が多く語られている。「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という状況もあることを踏まえ、今後も道徳教育の充実のために、教員の負担軽減のための予算と加配、時間の確保を要望する声も多く挙がっている。

5～7にも、元の文章で見ると、小・中学校における実践を通しての願いや思い、また不安も記述されている。

5では、「子どもは道徳が好き」「道徳科は子どもの変容を見る上で大切な教科、多様性を引き出せる」「子どもの心が動く授業でありたい」「子どもの実践意欲が増してきている」という肯定的な思いから、よりよい授業の実現のために、「力のある教材」「展開方法等多くの実践例」「発問の後の問い直しの具体例」を多く知りたいという強い要望が見られる。

6では、「もし自分だったらと考える問題解決型の授業で自分とは違う多様な考えを受け止める資質を育てていく」という思いや「考えや思いを書いたり発表したりする子はある程度見取ることができるが、表出しない子の変容を見取るのが難しい」という、実践から来る悩みが見られる。さらに、「行動の所見をはじめ、通知表で記入しなければならないことが多すぎる」ことから、「教科化されたことにより、教師の意識が授業づくりから評価としての通知表、評価文章がどうあるべきかということにシフトされている」ことを懸念する記述もみられる。

7では、「今年度公開研究会で最も集客したのは道徳科だった。しかし、道徳科研究部の教員は1名。主要教科に比べたら力の入れ方が弱いことは明らか。管理職の考えにもよるが、教育界全体で（特に管理職層での）道徳科への力のかけ方の弱さを感じる。」という研修の必要性和対応のずれを感じている記述がある。このことを含め、「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という記述や、質問4項目中3項目において「研修」という抽出語が上位10位以内から消えたことは気になる。スタートしたばか

りで各校の研修が軽減されることは、避けなければならない。2019年度では、2018年度より今後進めるべき研修の内容（展開の工夫・評価の具体例・学びの姿の共有・学習課題と中心発問との関連）等、積極的な実践を伴ったより具体的な考えが示されていることは、心強く思われる。

3. 共起ネットワーク（関連語検索）から読み取れること

①の「道徳教育、道徳科推進についての概観」において中心となる抽出語「道徳」に一番強く関係しているのは、「授業」「評価」である。ここでは、この2つの抽出語を取り上げ関連語検索を行い、内容の把握を試みた。

（1）『授業』について

『授業』では、大きく7つの語群ができた。

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1 は、授業の「必要性」と「担任」について | 2 は、授業に対する教師の「意識」 |
| 3 は、「加配」の要望 | 4 は、「教科書」を使ってみて |
| 5 は、授業の「大切」さとその「方法」 | 6 は、「発問」等について |
| 7 は、子どもの心の育ちに関わって | 8 は、「教材研究」するための時間の確保 |

ここには、『授業』にかかわる現場の率直な思いが見られる。

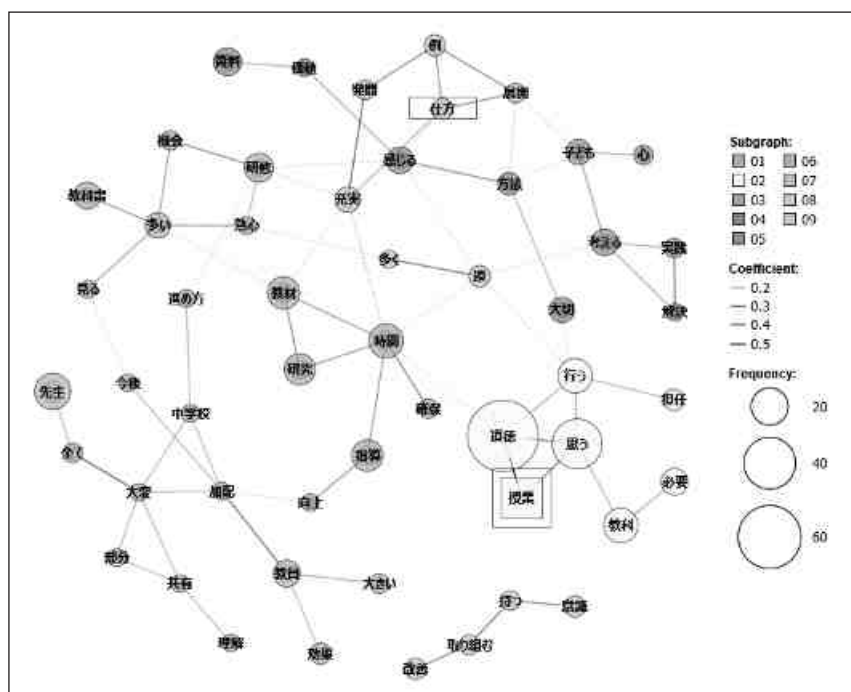


図4 2019年度関連語検索「授業」の共起ネットワーク

語群1には、『授業』の関連語である「必要」「担任」というキーワードが存在する。

まず「必要」の語が書かれている元の文章を見ると、「道德教育は教育活動に大変必要」だからこそ、担任には「時間的精神的な余裕が必要」であるという思いが伺える。同様に、多忙となる「授業改善は必要だが、(通知表等の)評価は必要ではない」、推進するならば「道德科専門教師(加配)が必要」という要望が見られる。

一方、よりよく推進するために「しばらく全員対象で研修を行い、より道德科に対して周知する必要がある」「授業は実施されるようになったが、レベルアップが必要」という。また、担任のみならず、副担・管理職、若手、ベテラン等、立場や経験に関わらず、責任と矜持をもつて取り組んでいる現状を紹介する記述も見られる。

語群2は、小さな語群ではあるが、キーワードが存在している。「もつ」は、関連性・ゆとり・苦手意識・熱意・意欲を「持つ」という記述内容において使用されている。「他教科等との関連性を持って道德科を進める」ことの大切さ、「教師にゆとりがあってはじめて新しい取り組みを推進できる」という内容が含まれている。さらに、「意識」は「教科化によってより意識して取り組むようになった」「教えるというより、気づかせるという意識改革を図ってほしい」「苦手意識を持つ先生も少なからずおられるが、多くの先生方が意欲や熱意を持って道德科の授業に取り組んでいることも知っていただきたい」「教科化されたことにより、我々教師の意識が、授業づくりという観点から、評価として通知表や要録に記載する文言、評価文章はどうあるべきかという観点に大きくシフトしたように感じる」といった内容になっており、大変前向きに取り組んでいる先生方の姿があるものの、本来の評価のあり方とは異なる方向に傾斜しているという気付きも見られる。

語群3では、「大変」「加配」「今後」がキーワードとなり、担任だけに負担がかかっている現状から加配によるサポート体制、学校全体としての道德教育推進体制の必要性を述べている。

語群4では「教科書」、語群5では「大切」、語群6では「発問」、語群7では「子ども」、語群8では「時間」がキーワードとなり、『授業』について物語っている。

(2)『評価』について

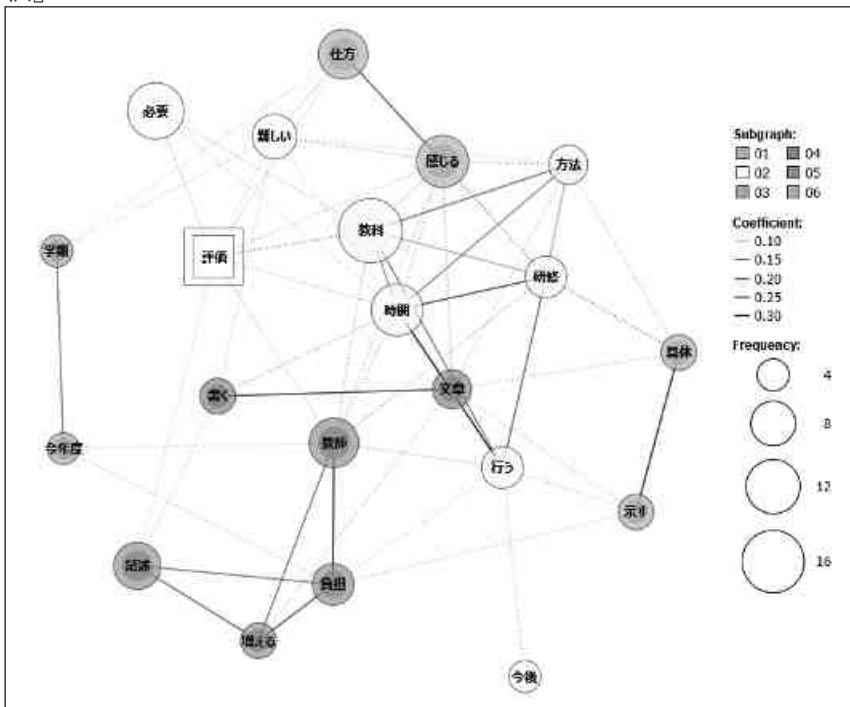


図5 2019年度関連語検索「評価」の共起ネットワーク

次に『評価』について見ていく。各質問項目の抽出語リストを見ると、『評価』は、どの質問項目においても多く抽出される。毎年度、「評価」の必要性については異論が多くある。ここでは、「必要」「感じる」「難しい」「今後」を関連語として挙げることができる。

例えば、「必要」については、『授業』におけるものと同様であるが、ここに位置づけられている「必要」が含まれている意見は「評価については必要でないとの声が多い」「授業改善、評価は必要だが、教科にする必要はない」「評価をするなら、具体的な成績のつけ方を提示し、一定の基準を明記し伝達する必要がある」「評価は必要だが、評価のための評価になっている」という一方で、「スタートしたばかりである。成果と課題はこれから練られていくと思う。1年や2年で判断できるものではない。継続した反省と改善が必要」、さらに、「子どもの変容を丁寧に見れば見るほど、評価（文章記述）に力が入る。時間をどのように生み出すのか、学校組織として考える必要がある」との意見もある。多様な思いや考えが入り混じっている。

「難しい」という語が使われている意見は、「子ども達の道徳心や道徳性を授業のみで見取るのは難しい」「考えや思いを書いたり発表したりする子はある程度見取れるが、表出しない子の変容を見取るのは難しい」「通知表や要録に記述するのに、ほとんどの教師が

苦勞している。教科なので評価するのは当然だが、本人や保護者に伝えるのが難しい」。だから、「評価方法の実践例等、ある程度のテンプレートが必要」「文部省からもう少し具体的な例を示してほしい」「ある程度のガイドラインが必要である」「保護者には具体的な授業の様子がある方が伝わりやすいし、要録には教材や内容項目が載ることはよくない」という部分で、NGの見極めが大変だった。やはり文例が必要、現場の判断に任せると厳しい」という道徳科を推進しているからこそその困惑も見られる。

4. 共起ネットワーク（外部変数と抽出語間）について

次に、共起ネットワークによる分析において、外部変数と抽出語間の関係性を見てみたい。ここでは、外部変数として「回答者の職階」を取り上げる。「道徳に関する抽出語」に、「回答者の職階」がどのようにつながっているのか、換言すると、回答者の立場（1 校長 2 副校長（教頭） 3 道徳教育推進教師（道徳主任） 4 教務主任、研究主任 5 それら以外）による道徳に関する意識の相違が抽出語にどのように反映されるのかについて知ることを目的とする。

図6を見ると、2018年度同様、回答者の職階1・2・3【校長・副校長（教頭）・道徳教育推進教師（道徳主任）】は、強い共起関係が見られ、職階4・5【教務主任（研究主任）・それら以外】とは異なっている。しかしながら、2018年度と比べてすべての職階において共起性が強まっている。当然のことではあるが、道徳教育推進教員（道徳主任）は「道徳」との共起関係をはじめ、「授業」「評価」等、どの抽出語、どの職階とも共起性が強い。道徳教育推進の役割を果たすべく、校長の指針を受け道徳教育推進者として、学校組織の中心に位置していることが見て取れる。

道徳教育（道徳科）推進のために、それぞれの職階において、それぞれが果たすべき役割を果たすことによって、課題は多くあるものの、子どもたちのよりよく生きるための道徳性を育むべく、取り組んでおられるととらえられる。

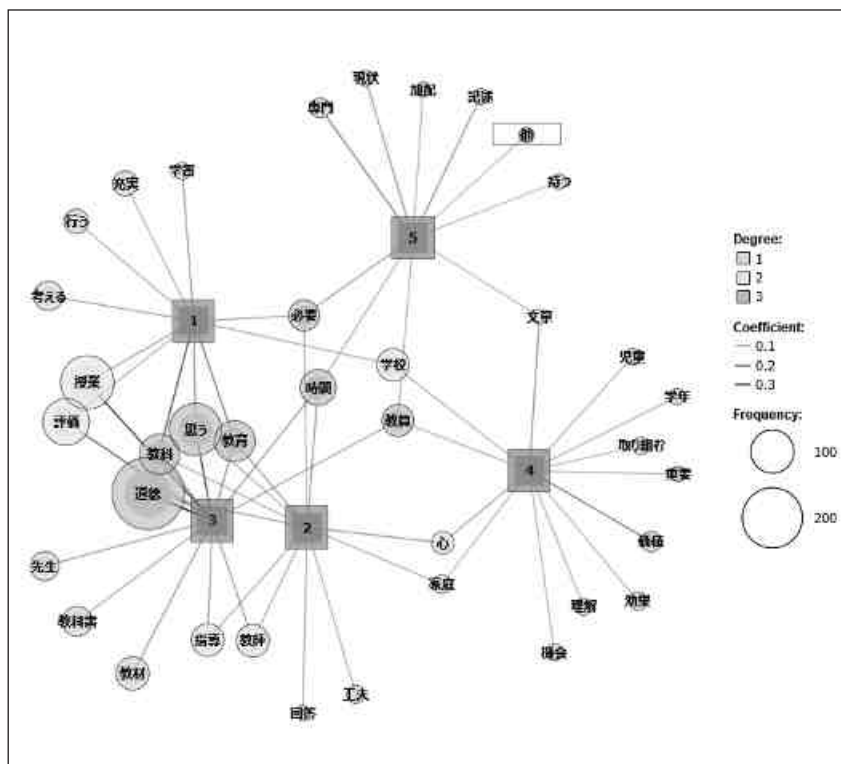


図6 2019年度共起ネットワーク 外部変数「職階」

以上、2019 年度も当該アンケート調査の最後の欄に記された自由記述文について、テキストマイニングを用いて抽出語リストと共起ネットワークをもとに分析し、結果を考察した。当該自由記述から回答者の率直で多様な意識を知ることができた。

『評価』については、今はまだ通知表や指導要録の評価の記述の仕方に関心が向いており、多忙な現場への説明（わかりやすい配信や例示）が必要かと思われる。分析の中でも見られたように、授業にフィードバックするという評価の基本的な在り方に向かえるよう舵を切るべきであると考えます。

また、2 共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れることの最後に記載した「研修の必要性和対応のずれを感じている」や、「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という記述、さらに、質問4 項目中3 項目から上位10 位の中に「研修」という抽出語が消えたこと等が気になる。道徳教育の抜本的改善・充実の中核となる「特別の教科 道徳」が、全面実施され、新しい道徳教育がスタートしたばかりであるのに、早くも研修体制が低下していくようであれば、これから進められる新教育課程による改革も、十分に成果を上げることが難しくなる。これからの教育改革は、世界的な新型コロナウイルス禍への対応や未曾有の科学技術の発達による社会の変化への対応において、「人

間として自分らしくどう生きるか」を正面から問いかける道徳教育の役割がますます大きくなる。道徳教育や道徳の授業についての「研修」は、継続的・発展的に取り組む必要がある。

2019年度の自由意見には、2018年度より今後進めるべき研修の内容（展開の工夫・評価の具体例・学びの姿の共有・学習課題と中心発問との関連）等、積極的な実践を伴ったより具体的な考えが示されていることや「3 共起ネットワーク（外部変数と抽出語間）」の分析における学校の推進体制の活性化の様子を見ると、新しい道徳教育（道徳科）の推進に向けて着実に取り組まれていることが伝わってくる。

そのような研修と実践が継続発展していくためには、教師の働き方改革とも併せて考える必要がある。研究機関等との連携も含めて、今後提案していきたい。

（小山久子）

※ 本研究は、科学研究（課題番号 17H02706）の成果の一部である。